



まちネット 寄居通信『さあ 手をつなご!』はみなさんの支援力がエネルギー源

戦後 78 年をかみしめる

戦争の記憶を残そう

連日のロシアによるウクライナ侵攻報道や北朝鮮から繰り返されるミサイル発射の報道は、知らず知らずのうちに有事への対応が優先といった感覚へ慣らされてきています。

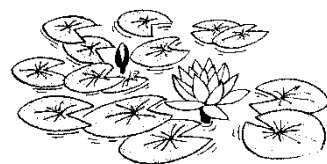
戦争を知らない世代が大半となった現在、もう一度日本国憲法の前文「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。」をかみしめたいと思います。戦争は、政治が、権力を握る政府が引き起こすことをあえて明言しています。政治に無関心などと言っている場合ではなくります。**生活は政治です。**

そこで今回は、過去のまちネット寄居の取り組みから再度私発のメッセージとして戦争体験のお話を取り上げました。忘れてはならない戦争の惨禍、戦後78年の流れの中で年々希薄になる平和への意識、誰かが与えてくれることではなく私たち一人一人が決して戦争を起こさせない社会を政権を作っていくことこそ戦争の抑止力につながっていくと確信します。(大北)



2013年
お話会から

10年間、毎年、戦争を体験した方のお話を聞いた「今しか聞けない 戦争体験」は、2006年に始まりました。お話し下さった方々は当時、既に80歳に近かったかと思いますが、どなたも、とても辛く苦しく悲しい思い出したくない、あの戦争中を振り返り、「今、話しておかなければ、」というお気持ちで登壇して下さいました。ここで、まちネットのHP（「まちネット寄居」で検索）にネット通信としてアーカイブされているものを書き出してみましたので、どうぞ、読んでみて下さい。



- 2006年 13号 :第1回 青木さん 学徒出陣でフィリピンに配属 内野さん 15歳で海軍に志願
- 2007年 16号 :第2回 新井さん 17歳で海軍へ入団後、台湾の高雄へ 南部さん 小学校3年生で学童集団疎開
- 2008年 20号 :第3回 中村さん シベリア抑留
- 2009年 22号 :第4回 Mさん 陸軍 事務官としてフィリピンのジャングルを逃げ回る
- 2010年 27号 :第5回 丸木美術館 原爆

の図 見学ツアー

- 2011年 30号 :第6回 南部さん 学童集団疎開
- 2012年 33号 :第7回 服部さん 原爆に被弾するも看護活動
- 2013年 35号 :第8回 服部さん 同上
- 2015年 39号 第9回 内野さん 軍国少年15歳で志願
- 2015年 41号 第10回 福島さん 戦時下の生活

読みかえしてみても、あの時のお一人お一人の声がかえりてきて、何としても聞かせておきたいという皆さんの強い気持ちが思い出されました。実体験を目の前で聞くことのインパクトの強さを、そして貴重さを改めて重く感じました。

やはり「情動記憶」=心を強く動かされる出来事は記憶に残りやすく、当たり前のことですが、単なる感想、感情とは違うという事を実感しました。

そして時代は戦争体験を「今しか聞けない」から、「今こそ聞かねば」になっていますが、実体験がある方にお話を聞くことは、とても難しい事になってしまいました。

どうしたら戦争をしないようになるのでしょうか。今、私たちの国はどこに位置し向かおうとしているのでしょうか。戦争の話は重くて辛いのですが、目を離すともっと辛いことになるはずなので、何か企画を！と考えています。学習会でも座談会でもよいと思います。何かアイデアがありましたら、どうぞ、お寄せください。

最後に、体験談を話して下さった内野さんの言葉。「くにちゃんって声をかけてくる近所の小学生に言うんだよ。『あのさー戦争って人が死ぬんだよ。』ってね。」
お兄さんを戦地で亡くされているときいていますが、静かに心に残る語り口でした。

K.Y

フィリピンのジャングルからの生還

今回は体験者の希望で本当に顔の見える小人数で開催となりました。19歳で陸軍の事務官としてマニラに赴き戦況の悪化する中、ジャングルの中を逃げまわり、奇跡的に生還出来た壮絶な内容でした。戦争の後半は、事務官(タイピスト)の仕事ではなくにわか講習を受けて特殊看護婦となり負傷者たちを担架で運ぶことがほとんどだったといひます。負傷した兵隊の中には少年志願兵として戦っていた10代の若者も多く、手足を吹き飛ばされ、苦しみのあまり「殺してくれ」と叫ぶ人も…。Mさんは言ひます。「今私達の平和で豊かな暮らしは、戦争で死んでいったあの若者たちをはじめたくさん犠牲者の上に成り立っている。それを思うと今の日本の社会の自分のことしか考えない状況が情けなくてたまらない。」

(通信22号からの抜粋)



Mさんは、当初墓場まで持っていくとおっしゃっていましたが、どうしても聞いておきたいという強い私たちの希望で、お話をしてくださりました。現在は、故人となっていますので、お名前を伏せてこの貴重な体験談を2023年8月現在、できる限り記録しておきたいと思ひます。

ただし、お話をお聞きしてから10年以上が経過、史実関係など不明瞭な点も多々ありますが、記憶をたどりながら話された主だった内容を記録しました。



生と死のはざま

本当に衝撃的な話だった。淡々とお話される中で、もう86歳になられるのに驚くほど鮮明な記憶に驚愕した。それほどご自身にとっても、決して忘れることのできない戦争体験だったのだと思う。

特異な体験としてお話してくださった方は女性で、19歳で陸軍司令部の事務官(タイピスト)として内地で狭き門を通過して採用になった。

Mさんは都内の生まれで、かなり裕福な家庭で育ち採用時には、家族や親族など事細かに調査が入ったという。給料は当時破格の金額だったので嬉しかったと話す。赴任当初はまだ日本が優勢で、フィリピンの軍司令部でも食料も十分あり、時には上層部内のパーティーなど楽しい一時もあった。

次第に戦況が悪化してついに指令本部そのものがジャングルの中へ逃げこむまで追い込まれ、彼女も同僚たちと軍部と同行。そんな中で、特殊看護婦として講習を受け、負傷したまだ17~8歳の若い志願兵のけがの手当てをさせられたことが今でも忘れられないと言っていた。医薬品などほとんどない中で、手足を吹き飛ばされた兵士の手当ての手伝いをさせられた。最初は血を見ただけで卒倒していたけれど、檄を飛ばされて必死でこらえて対応するようになったという。けれど、10代の若者たちはどんどん衰弱し、激痛と闘いながら「お母さん、お母さん」と呼びながら亡くなってゆく様は生き地獄だった。

ああ、私はこれで死ぬのだな…

追い込まれてどんどん奥地へと逃げ込み、道中、食料もなくなり、草など口に入るものは何でも食べた。おかげでひどい下痢になり、体力は落ちやっと動いていたという。当時、皆口の中や口周辺が草の緑色に染まってしまいひどい人相にもなってしまった。移動する前に渡されたわずかな塩だけは命綱としてみな大事に抱えていたという。

逃げ惑う中、ひどい下痢ですっかり衰弱してしまった彼女は、ついに身動きできなくなってしまった。すると同僚たちはもう私が助からないと思ったようで、私から塩を取って行ってしまった。

ああ、私はもうこれで死ぬのだなと覚悟を決めた

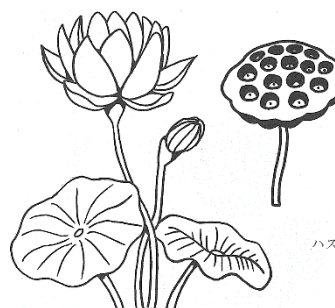
という。その時はみな自分が生きること必死で仲間を連れていくことなどできなかった。だから恨むこともない、立場が変わったら私も同じようにしただろうと思う。

置いていかれてからどのくらいの時間がたったのか定かではないが、ちょうど自分のいたところを通りかかった兵隊さんたちがいた。その中の一人の青年将校が私がまだ息のあるのを気が付いて皆のところまで、背負って移動してくれた。そして、「戦況が最悪になっている。このままここにいたら必ず死ぬ。君たちは民間人だから死ぬことはない。このまま投降して生き延びなさい」と言って促したという。結果、わずかな同僚たちと投降して、捕虜となり、奇跡的に日本に帰れたという。



平和になって、普通の暮らしに戻ってからも、あの時のことは決して忘れられない。「お母さん、お母さん」と亡くなっていた若者の姿は脳裏から離れない。だんだん日本がおかしくなっている。戦後高度経済成長し、豊かになっても、社会のゆがみはどんどん噴出している。死んでいった若者はなんのために命を懸けたのかと問う。生前、正義感の強かった彼女は私に訴えていた。たくさんの「今しか聞けない戦争体験のお話」を聞く中で、忘れられないMさんのお話だ。Mさんは私の母と同年齢だった。内地にいた母とは全く違った終戦を迎えた事実を突きつけられた。

大北秀子



夏に想うこと



夏は戦争と原爆の悲惨さについて語られる季節であった。

子どもの頃の夏休み、青い空に入道雲、プール、蝉の声、スイカに風鈴。そしてテレビでは原爆慰霊式典の放送、天皇陛下の玉音放送、戦時中の記録映像。新聞テレビで関連の事柄が多く取り上げられ、意識しなくとも自ずと戦争悔悟の情報は入っていた。

身内の話と結び付いて語られることもある。いつも穏やかに笑っていた叔母は満州からの引き揚げ者。女と思われぬよう髪を剃り、途中長女を失うという経験をしてやっとの思いで帰ってきたという。他の親戚からそう聞いたが叔母本人がそれについて語ることは終ぞなかった。

重い経験はその口も重くして語れなかったのだろうか。今、終戦から70年以上過ぎて少しずつではあるが、話す事が無かった戦争の記憶を語り始めた人の話を聞く。

目に見えない戦争の傷は傍目には判らない。伝え聞く話よりもさらに過酷な経験が大きな傷となり心の底深く抱えたままの人々がまだいる。戦争を知らない世代ではあるが、夏は戦争を考えたい。夏のこの時期になると、マスコミが取り上げて放送または記事にしている。幸いなるかな。

軍備増強や憲法9条、知らない事を知る大事な機会である。どんな武器を持とうとも人間は生身である。戦場で血を流し身体に傷を負い心を壊す。二度と繰り返さない為にも、改めて戦争について学び語り合う必要を痛感する。



Y. M.

ネット会員募集

毎日の暮らしの中で、感じていること、困っていることなど皆で話すことからスタートです。私発が原点です。安心して暮らせる地域を私たちの手で。ぜひ、お仲間になってください。

問合せ：大北（080-5933-7154）

※ショートメールでもOKです。



かたかごサロン

居場所つくりを念頭に4月からスタートしたかたかごサロンは、まだまだ認知度も低く寄ってくださる方は常連さんが主です。お声掛けした生活クラブの班の方もネット会員の皆さんもみな現役で仕事に従事している方が多く、ほっと一息までとり着いていないのが実情ですが、継続することで新たな展開の場が出現してくることを信じて居場所つくりを続けていきたいと思えます。



編集後記

統一地方選挙、県知事選挙も終わり、猛暑の夏が過ぎていきます。新しい体制でまちネット寄居も再出発します。昨年行われた寄居町町長選挙から1年。新しい議員5名を迎えての新体制は、どんな雰囲気なのでしょうか？議会傍聴が必要ですね。地区や町の行事も復活してきています。徐々に活気が戻りつつ、コロナ後の新しい形も出現しながら、模索が続けられています。2023年後半もあとわずかですが、まだまだできることがあります。